

2016年1月の大気大循環と世界の天候

大気大循環

月平均500 hPa 高度をみると、ユーラシア大陸では波列パターンが見られ、ヨーロッパ東部、中国東部で負偏差、西シベリアでは明瞭な正偏差だった。日本の南東海上では正偏差となった。ユーラシア大陸南部から日本の東海上にかけての偏西風は南北に蛇行し、日本付近では平年の位置より北寄りを流れた。帯状平均した対流圏の気温は、北緯40度付近と南半球の高緯度を除いて広く高温偏差となった。

熱帯の対流活動は、平年と比べて、太平洋中部、大西洋熱帯域の南半球側、南インド洋中部で活発、インドネシア付近～太平洋西部、大西洋熱帯域の北半球側で不活発だった。赤道季節内振動に伴う対流活発な位相は、上旬から中旬前半にかけて太平洋東部～インド洋を東進し、その後は位相の東進が不明瞭となった。対流圏下層では、インドネシア付近で南北半球対の高気圧性循環偏差となった。太平洋中部～東部では低気圧性循環偏差が南北半球対で見られ、赤道域では西風偏差が卓越した。対流圏上層では、太平洋西部で低気圧性循環偏差が、太平洋中部～東部では高気圧性循環

偏差が南北半球対で見られた。南方振動指数は-1.7だった。

世界の天候

2016年1月の世界の月平均気温偏差は+0.52°C（速報値）で、1891年の統計開始以来、最も高い値となった。1月の世界の平均気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は約0.75°C/100年（速報値）である。

主な異常天候発生地域は次のとおり。

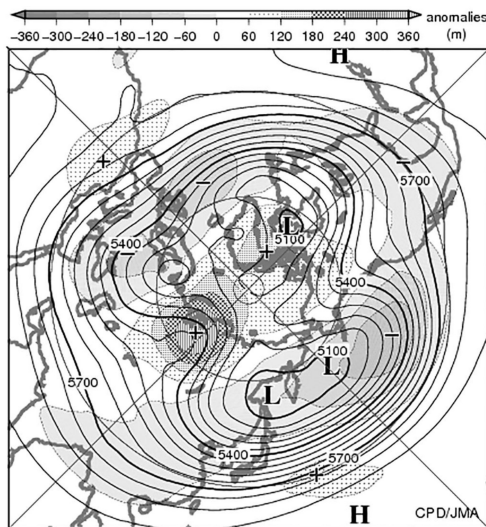
- 低緯度域の各地で異常高温となった。
- モンゴル東部～中国北部では異常低温となった。
- メラネシア～オーストラリア北部では異常少雨となった。

（気象庁 地球環境・海洋部 気候情報課）

※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ

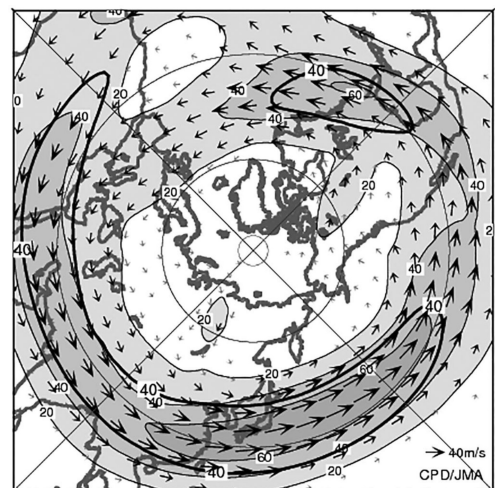
「気候系監視速報」をご覧ください。

<http://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/diag/sokuho/index.html>



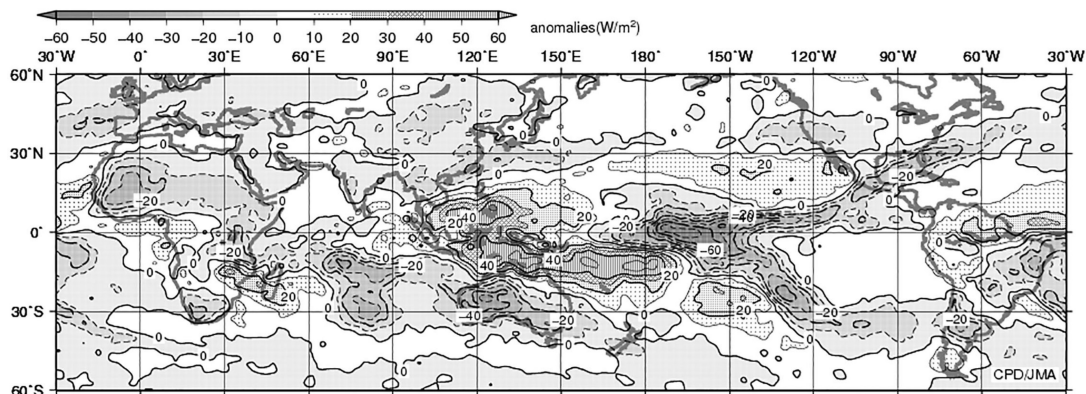
2016年1月の北半球月平均500 hPa 高度及び平年偏差

等値線間隔は60 m。陰影は平年偏差。平年値は1981～2010年の平均値。



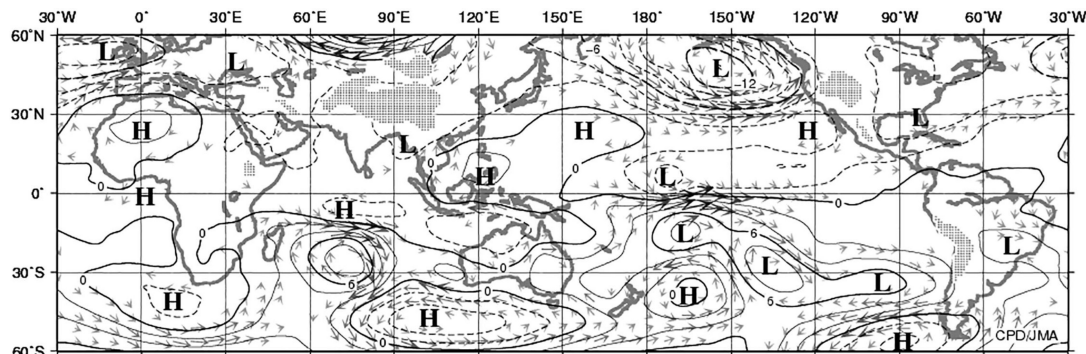
2016年1月の北半球月平均200 hPa 風速及び風ベクトル

等値線間隔は20 m/s。太実線は平年の風速で等値線間隔は40 m/s。平年値は1981～2010年の平均値。



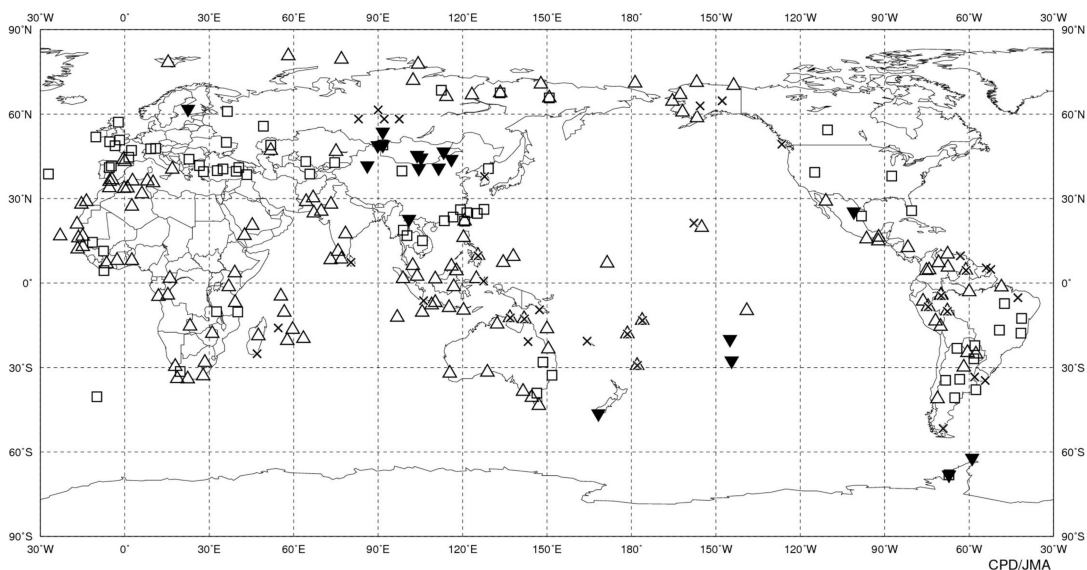
2016年1月の月平均外向き長波放射量年偏差

等値線間隔は10 W/m²で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。米国海洋大気庁（NOAA）より提供されたデータを用いて作成。年偏差は1981～2010年の平均値。



2016年1月の月平均850 hPa 流線関数年偏差及び風年偏差ベクトル

流線関数の偏差の等値線間隔は $2 \times 10^6 \text{ m}^2/\text{s}$ 。年偏差は1981～2010年の平均値。



2016年1月の世界の異常天候分布図 △異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨
異常高温・低温は標準偏差の1.83倍を超える場合、異常多雨・少雨は降水5分位値が6及び0。